

教育長定例記者会見 会見録

日時：令和3年6月3日（木） 11時30分～

場所：教育委員室

発表項目

- ・ モデル校で児童生徒のレジリエンスを育む取組を実施します！

発表項目

○モデル校で児童生徒のレジリエンスを育む取組を実施します！

本日 1 点説明をいたします。モデル校で児童生徒のレジリエンスを育む取組を実施するというものです。目的ですけれども、今年度初めて取り組むものです。変化が激しく先行き不透明と言われる時代を生きる児童生徒が、学校生活、それから友人関係などでつまずいたり、失敗したり、思うようにいかないという状況がありますけれども、こういった状況を受けとめて適応し、場合によっては立ち直って回復する力、一般的にレジリエンスと呼ばれますけれども、こういった力を高められるように、モデル校で取組を実施するというものです。

モデル校はご覧のとおり、鈴鹿市の桜島小学校の6年生、白子中学校の1年生、志摩市の神明小学校の5・6年生、鵜方小学校の5・6年生、それから文岡中学校の全生徒になります。

取組内容ですけれども、まず、今月6月中に教職員の共通理解と、児童生徒への事前アンケートを行います。教員がレジリエンスを育む取組を実施することの意義、取組内容、進め方などについての研修を受けて、共通理解を図ります。それから学習プログラムを実施する前の児童生徒のレジリエンスの状態を把握するため、対象の児童生徒に事前アンケートを行います。その上で、6月から2月にかけて学習プログラムを実施していきます。例えば、人の感情についての理解、物の見方考え方に多様な捉え方がある、ポジティブな感情を持つことなどについて、ソーシャルスキルトレーニングの手法も取り入れた学習プログラムを、6回シリーズで授業で実施いたします。このプログラムは本県のスクールカウンセラーの経験があつて教育心理の専門家でもある大学教授とともに作成し、授業でのアドバイスも受けながら実施するものです。そこに①②③から⑥まで、事例にも即しながら、レジリエンスが高まるような指導案も考えて、各学校で実施を6回いたします。

それから帰りの会とか、家庭でも、例えばイライラしたり、思うようにいかなかったりしたそれぞれの自分の場面を思い出して、どのように受けとめて、どうすればうまくその気持ちから脱することができるかなどを考えるワークシートも随時実施いたします。

その上で、事後アンケートということで、6回の学習プログラムを実施した後、児童生徒

のレジリエンスがどのように変容したかを把握するため、事後アンケートを実施いたします。また、次年度に向けて、取組の成果と課題を検証いたします。アンケートの概要ですけれども、例えば、「つらい経験から学ぶことがあると思うか」とか、これは（大きく物事を俯瞰する力）であったり、「困ったときに助けてほしいと伝えることができるか」（援助を要請する力）であったり、「自分が困っていることを解決するために、いろんな方法を考えようとするか」（解決志向性）であったり、「物事はうまくいくと思っているか」（楽観性）であったり、「自分のことを大切に感じているか」（自己肯定感）であったり、他にも項目があるんですけれども、こういった項目について、5段階で回答してもらいます。

学習プログラムとモデル校でのアドバイザーは、皇學館大学の渡邊教授にお願いしております。

実施後の対応ですけれども、モデル校での取組状況、それからアンケートを通じた児童生徒の変容などを踏まえて、学習プログラムの成果と課題も検証して、それに必要な改善を加えて、令和4年度もこのモデル校での取組をするとともに、他校への普及を進めていきたいと思っております。

私からの説明は以上です。よろしくお願いいたします。

発表項目に関する質疑

○モデル校で児童生徒のレジリエンスを育む取組を実施します！

(質) これはなにか全国的に先行事例があったりするものなんでしょうか。

(答) 部分的に、少し取り組まれているというのは見たことがあるんですけれども、県全体で取り組んでいるというところは今のところ把握はしておりません。どこかの市で取り組まれたとか、あるいはかつて少し取り組んでみたというのは把握できたんですけれども、県全体でということは聞いていません。

(質) 県全体でというのはつまり、都道府県教育委員会がやっているっていうのはということですか。

(答) そうです。それでいいですか。

(答 生徒指導課) はい。

(質) わかりました。あとちなみに鈴鹿と志摩の学校が選定されてますけれども、これは何か立候補があったですとかありますか。

(答) そうですね。こういう取組をするというのは予算でも市町教育長会議とかでも説明をしております、それでいろいろやり取りをする中で、鈴鹿市さんと志摩市さんがぜひということがありましたので、取り組んでいただくということになりました。それで、桜島は白子中学の学区ですし、文岡中学、神明、鶴方というのも学区を同じにして取り組まれるということです。あと、やっぱり中学校へ上がる段階で、中1ギャップと従来から言われていますけれども、そこでいろんな学校生活とか、友達関係の状態というのも変わったりしますので、その小学校高学年と中学校の段階で取り組んでいこうということで話を

して、この2市で取り組んでいただくことになりました。

(質) ありがとうございます。発表事項、質問があればお願いします。

(質) これは基本的に不登校防止とか、そういう意味合いがある。方向性といいますか。

(答) 不登校というところだけに限らないんですけれども、いろんな状況で、例えば不登校になったり、いじめがあったり、いじめをしたりということで、なんというか、いじめをする子も相手の気持ちを察したりできなかったり、あるいは、自分が、いじめじゃなくても、失敗したと思ったりする気持ちがうまく整理できていなくて、やっぱり落ち込んだりとかするっていう児童生徒さん、大人もそうですけれども、いますので、そういった子どもたちが、失敗しても大丈夫と思えたり、それから、自分の感情とうまく向き合える力を高めて、豊かな学校生活、安全な学校生活、安心して送れるようにしたいというふうに思っています。不登校の子どもたちの中にも、いろんな要因あると思うんですけれども、そういった対人関係とか、学校生活ということでのきっかけとかいうのもあると思いますので、こういった取組が、今おっしゃっていただいた不登校の未然防止というか、そういった面にもつなげていければというふうに思っています。

(質) 「レジリエンス」って、一般的に防災とかそういう分野で使われることが多いのかなというイメージなんですけれども、教育の分野でも「レジリエンス教育」というのが、概念としてある。

(答) そうですね、おっしゃるように国土強靱化で全国的にも「ナショナルレジリエンス」という言い方を最近されたりしますけれども、心理的な面でも、元々は物理の用語、科学の用語だと思うんですけれども、その弾性力とか反発力っていうことだと思うんですけれども、そういう気持ちの面とか、自己肯定感という面でも、世界的にも使われているようですし、日本の中でも教育心理の方とか、そういった力を高める重要性というのは最近言われているところです。

(質) これってすいません、確認なんですけど、一番いま想定している目的としては、令和4年度以降のモデル校での取組につなげるとともに他校への普及ってあるんですけれども、要は県内の全小中学校に、学年とかもいろいろあるんでしょうけど、実施していくということが目的なんでしょうか、最終的に。

(答) そうですね、いま思いとしてはあるんですけれども、6回やって変容とかを見て、まず学習プログラム、三重県初めての取組ですので、もう少しこうした方が児童生徒の心に響いたとかがあると思いますので、あるいはこういう取組が変容につながったということがあると思いますので、まず今年度は学習プログラムをやって、課題を踏まえて、学習プログラムをもう少しブラッシュアップして、次年度はこの学校で取り組むとともに、その市であったり他の市にも広げていきたいとは思っているんですけれども、いきなり全市町ということまでは少し難しい、難しいというかステップを踏む必要があると思っていますので、その辺りは市町教育委員会とも今回の取組を情報共有して、希望は募らせていただきたいと思います。

(質) 学習プログラムって、具体的に例えばテキストがあって進めていく形のもののなのか、どんな形なんですか。

(答 生徒指導課) テキストというものは特にございません。帰りの会とか家庭で行うワークシートというものが生徒には伝わるんですけども、主にプログラムというものは指導案でして、教員がこのような観点で授業を進めていくと、そういったプログラムがございます。

(質) それをどういう風に、実際に指導するかっていうのは学校ごとに考えていくんですか。

(答 生徒指導課) 今ですね、大枠をそこに①から⑥に示させてもらいましたけれども、大学の教授からは、例えばまず1回目の授業はこのようにするという具体的な指導案が示されております。それを、自分の小学校ではこのようにしようかとか、中学校ではこのようにしようかという形で、大枠が示されておりますので、大学教授のアドバイスをいただきながら、各学校でより詳細な指導案を作っていくこととなります。

(答) ちょっと補足させていただきますと、1回目でしたら例えば授業のねらいとして3ついま考えておまして、生徒にこう言うかどうかはありますけれども、レジリエンスとは何かを理解するとか、ポジティブな感情とどうしてもネガティブな感情があって、それを理解するとか、ネガティブな感情を抜け出す方法を理解するとかっていうことを授業のねらいとして、学級活動とか例えば道徳とか総合学習とか、適切な時間で1限目をやって、その際にワークシートも配付して、自分がポジティブと思った項目を書いて、その時の気持ちを生徒が書いたり、あるいはネガティブでも同じようにしたり、場合によってはイライラした場面とそのイライラ度を自分のその時の感情を思い出して、それを見える化して、なぜそうなったか、見方とか考え方はいろいろあるということを感じたりするようなことを6回シリーズでやってまいります。まだ6回まで完全な案になってないので、1回、2回、3回とやりながら、児童生徒の状況に応じて、大学教授のアドバイスを受けて、より良いものにしていくつもりです。ただ、おっしゃっていただくように、各学校が思い思いでやっても難しい面もあるかもわかりませんので、6月にきちっと大学の教授も担当する各学校の教職員に研修という形で、意義とか進め方とか、そういった重要なことをしっかり研修するつもりでおります。

(質) 進め方の時間の確保の仕方なんですけど、今おっしゃってた総合、学級活動とか道徳の時間で、取組についてやって、授業として、6回分が組み込まれるという形ですか。

(答) はい。そうです。

(質) プラスアルファ、帰りの会とか家庭の中で、ワークシートとして宿題みたいな形が出てくる。

(答) はい。そうですね。おっしゃっていただいたように道徳の時間でも、こういったことを少しテーマにする学校もありますので、そういう学校はうまくその時間を活用したり、あるいはロングホームルームの時間もありますので、それは6回をどの時点、どの時間で確保する、授業の時間で確保するかは各学校が考えます。おっしゃっていただいたように

あと、その子どもたちの状況に応じて、ワークシートのようなものを持って帰ってもらって、家で自分で向き合ってもらって、自分の考えをまた、整理したり、気づいたりするっていう、またそれを持ってきて、授業でみんなで共有したりっていう、そんな感じです。

(質) そもそもどこなんですけども、授業と、コロナ禍ってあんまり関係がないですか。

(答) 関係が全くないということもないんですけども、昨年度からのコロナにおいて、やっぱり子どもたちが、それまでの学校生活に比べると、マスクのことであったりそれから授業の内容であったり、これまでと違う状況がありますので、何らかそういったストレスなのかうまく、もう少し、従来の活動をしたいなという思いもあると思うんです。そういう状況もありますので、今までだったら、上手く受け流せたことも、少しストレスに感じたりするってこともあろうかと思しますので、そういうことも併せて、子どもたちの気持ちを、コロナのこの時代、一生懸命頑張ってますけれども、さらに、ポジティブの感情であったり自己肯定感を高めて、学校生活を送ってもらえるようにという気持ちもあります。

(質) 成果も伺ったんですけど、基本的には何か気持ちの問題で、なかなか難しいかなと。基本的にはアンケートで言葉を見ていくような感じ。

(答) そうですね。アンケート10数項目を今、考えてるんですけども、これは大学教授の方を中心に考えていただいているんですけども、やっぱりその、変容がどうだったかっていうのを見るのが中心です。あと、その授業の中でも、やっぱり子どもたちの気づきとか対人関係っていうか、友達同士での声のかけ合いっていう変容もあると思いますので、その辺りも丁寧に見ながら、どの辺りがやっぱり効果的なのか有効なのかっていうのは見ていきたいというふうに思ってます。

(質) アンケートは何て言うか、我々がやっているストレスチェックみたいな感じと考えるといいんですか。

(答) ストレスチェックよりも、もうなんて言うんでしょう。もう少し幅広いものになると思うんですが。ちょっとこの資料にもありますけれども、嫌なことがあったらどうしてもその嫌だなと思ってそこがずっと続くように思ったり、そのことがすべてのように思ったりしてしまいますけれども、それをもう少し俯瞰できるようなことであったり、あるいは、直接的にこういう、相手が傷つかないような話し方ができるかとか、そういう相手との関係とか、誰かに何かを頼むときに、迷惑がかからないかを考えてるかとか、あるいは、自分の考えを友達にきちんと伝えることができるかとか、そういったことも含めて、ちょっとストレスを測るだけよりももう少し幅広く、見たいというふうに思ってます。

(質) モデル校なんですけど、単年度でまた別のモデル校っていう意味で言われてるんですか。その次年度のモデル校。

(答) えっとですね、ごめんなさい次年度のっていうのはこれは今年度のモデル校は、基本的に次年度も継続してやっていこうというふうに話をしております。

(質) 何年間かけて、大きく。

(答) ちょっとそうですね基本的にはまず今年度初めてですので、学習プログラムも改善は多分必要だと思うんですけども、その改善を次につなげるってということと、それから、小学校から中学校ですね、これ6年生と、次の中学校に行った時に、今年度は小学校6年生の時の、レジリエンスと、大きな違う学校からも集まってきて中1になって、中1ギャップと言われる時の、その時のもう1回やって、その時の変容とかを基本的に見たいという思いがありますので、2年はしたいんですけども、それ以降は、モデル校じゃなくても、自然にこうやっていただければと思うんですけども、そこら辺のまだ整理を、ちょっとまず今年度やってからというふうに思っておりますので、まず今年度来年度はやりたいなと思ってます。

以上、11時52分終了